
亡国の印章

ヤマグチ提督

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

亡国の印章

【Nコード】

N0761H

【作者名】

ヤマグチ提督

【あらすじ】

これはまだ剣と魔法が力を持っていた時代の物語、主人公・カイルは小さい頃からの夢である、聖王国騎士団の試験に見事合格、幼なじみのクライブと共に日々磨きあっていた、だがそんな毎日はある日突然終わり、主人公達は大いなる敵と、宿命に立ち向かう戦いへと誘われる、ある少女との出会いによって

序章 始まり

真つ白な光りの中でカイルはひざまづく

「汝、カイル・ブレフォードは、神と聖霊の名の元に何時如何なる時も、聖王国アルヘイムに忠誠を誓うか？」

カイルは忠誠の印に右手を差し出す

「聖国の印章の名の元に」

「よろしい」

神官は、一つの水晶を左手に持ち、右手で十字に印を切る、すると差し出されたカイルの右手に印章が刻まれた

「終わりましたよ」

カイルは立ち上がり、他の騎士の列に列ぶ

「これで戴印式を終了する」

序列した騎士達が一斉に剣を抜き、儀礼の構えを取る

「聖国の名の元に」

神官は一礼して聖堂を退出する、一斉に緊張が解ける、カイルも一安心

「終わった・・・」

騎士達も思い思いに話し出す、するといきなり背中に衝撃が走る

「やったな！カイル」

「び、びっくりしたー、いきなり叩かないでよ、クライブ」

「ははっ、いやでもよく合格したな俺達」

クライブは満面の笑みで喜びを表す

「うん、クライブはともかく、僕は体が小さい方だから心配だったよ」

「実は俺もぎりぎりだったんだよ、印章の方が足りなくてさ、冷や冷やしっぱなしだったぜ」

「でも楽しみだね、今日から騎士様になれるんだ」

すると聖堂の扉が開かれ騎士達が静まりかえる、

上官らしいその男は、白い聖堂に似つかわしくない、黒い風貌で現れた「お前達が新しい見習いか」

騎士達は見習いという言葉に、小さく不満を漏らす

「おいお前ら、もう一人前だと勘違いしてるんじゃないだろうな？、聖国の名前を背負うんだ、一朝一夕で教会騎士になれると思うなよ」目付き鋭い教官と目が会った

「フツ、では早速だが訓練を始める、兵練所に集合だ、歩くんじゃないぞ！」

騎士達は教官の剣幕に押されずさま、返事をした

夕方、騎士達の訓練は終わった、だがその様子は惨憺たるものだった、腕立て伏せ三百回に、腹筋二百回、正式採用の甲冑を着込んでの素振り五百回と兵練所を走り込み五十周など、スパルタというのは程遠い拷問のような時間だった

「こんなのが毎日・・・」

「さすがにやばかったな」

二人はヘットヘットになりながら部屋に向かった

「着いた・・・」

「これでやっと休めるな、飯でも食いに・・・」

「おい貴様等」

不意に横から声を掛けられた、振り向くとあの鬼教官が立っていた「伝え忘れていたが、今日の哨戒任務の当番はお前達二人だ、9時まで居住区を見回れ、以上だ」

そう言うとき鬼教官はさっさといった

「う、うそ」

至極情けない声で悲鳴をあげるカイル

「あの鬼教官の言う事だ、冗談じゃないだろうな」

二人はフラフラと居住区へ向かう

居住区辺りに着いた二人は、二手に分かれて見回りを開始した、
「クライブはそっちお願い」

「おう、任せろ」

クライブが歩き始めたのを見て、カイルも見回りを始める

「立派な白騎士になる為にはこれくらいこなさなきゃ」

カイルは歩きながら自分に言い聞かせながら歩く

少し歩くと緩やかな下り坂に差し掛かる、家に帰る途中の子供達を見ながら辺りを見回す、頬を爽やかな風が撫でる、

「この辺りは・・・よしとつ、後は小さい路地だな」

カイルは入り組んだ路地に入る、聖王国といえど黄昏時の明かりの無い暗い路地は、少し怖かった、早々に見回りを終えて帰ろうとした時、何か聞こえた

「ゆ、幽霊？」

カイルは少しびくびくしながら聞き耳を立てる

「スッ・・・ヒクッ・・・」

どうやら囁り泣く声のようだ、小さい鉄格子の張られた小窓から聞こえて来るが、高い所にあるので中の様子は、わからない

「大丈夫・・・ですか？」

カイルは心配になって尋ねる、少女らしき声の主はゆっくりと答える

「ええ・・・なんでもないの」

「でもそんな所で泣いてるなんて、何かあったの？」

少女は少しの間を開けてから、答える

「ありがとう、でも私が悪いの、決まりを守らなかったから」

「そうか、分かったよ」

門限を守らなかったとかそういう事なのかな、と聞こうかと思ったがやめておく

「じゃあ僕はそろそろ行ないと」

カイルが歩き始める

「あの・・・また来てくれますか？」

くるりと振り返り答える

「うん、また明日」

見回りを終えたカイルは

城門前で、クライブを見つける、カイルを待っていたようだ

「遅せーじゃねーか相棒」

「いやゴメン、こっちは入り組んだ道が多くてさ」

「こっちなんかすぐ終わっちまうし、おまけに婆さんからパンまで貰ったよ、いつもご苦労様って」

そういうと、袋の中から丸いパンを取り出し、カイルにわたした

「おすそ分けた」

「ありがと」

ながら部屋に向かう

「じゃあ今度こそ飯食いに行くか」

「きょうはいいや、なんか疲れ過ぎて食欲ない」

「んー、そうかじゃあ明日な、部屋の中で死ぬなよ、お前なら過労で死にかねないからな」

「そこまで柔じゃないよ」

カイルは力無くドアを閉めると服を脱ぎ始めた、新米騎士とはいえ本部勤めなので、一部屋に小さい風呂場とトイレがついている、しかも新開発されたシャワーなる物が付けられていると聞く、さすが聖堂騎士

「はあー」

カイルは体の汚れを落としながら、少女の事を思い出していた

序章 始まり（後書き）

皆様、私の処女作「亡国の印章」を読んでくれてありがとうございます。まず、連載の遅れや、不自然な話しの流れ、誤字脱字の雨あられになるかもしれませんが、何とぞ感想を下さい、マジ無関心とかキツイので、でも男は案外グラスハートなのでお手柔らかに、

第一章 白いその手に太陽を（前書き）

寝る間も惜しみ書きました、読んでくれれば嬉しいです

第一章 白いその手に太陽を

朝日で照らされた部屋の中でカイルは目を覚ます

「よっ」

「！！！！！！」

「あたたた」

カイルは全身が軋むような痛みに驚く
体の隅々まで筋肉痛のようだ

「ひどいな・・・、今日が印章術の勉強でよかった」

カイルはゆつくりと起き上がり

寝巻から騎士団の制服に着替えた後

朝食のお誘いにクライブの部屋を訪ねる

「クライブ、入ってもいい？」

おう、と返事が聞こえたので中に入る

「うわ・・・何してるの？」

筋肉痛のカイルを尻目に、クライブはベットに足を引っかけて腹筋
をしている所だった

「ん？そんなに見つめるなよ」

クライブはまた腹筋をやり始めた

「クライブってやっぱり筋肉バカだよねー」

「失敬なっ奴だなっ、ただっ暇だったからっやっていたっ、ただだ
っ」

腹筋することに言葉が跳ねる

「そろそろ朝ごはん食べにいかないの？、僕は昨日食べてないから
ペコペコなんだけど」

「おっ、そういえば俺も腹が減ったな」

クライブはそういうと跳ね上がって、近くの制服にそでを通す

「よし、じゃあゆつくりと進もう」

おじいさんのようなカイルと、ピンピンのクライブは食堂へ向かう

「ここかぁー」

二人は他の隊員達と合流して中に入る、入口のすぐ右側にずらりと食べ物が並ぶ、クライブは肉類を中心に取っていく、カイルはパンとオレンジジュース、ポテトフライにサラダとデザートプリンを選んだ、近めの席を選び座った

「ガッツリといただきます」

クライブは神妙な顔で手を合わせた後、もの凄いスピードで食べ始める

「クライブ、腹壊すよ？」

カイルもゆつくりと食べる

二人は食べ終わった後、講堂へ向かう、途中クライブが手摺りで遊んで、鬼教官に見つかり、罰を与えられる以外何もなかった

その後講堂の席で座ったが、開始5分くらいからクライブは眠ってしまっていた

「全く・・・もう」

クライブに呆れつつ、カイルは授業を受ける、印章術に興味を持つカイルは目を輝かせながら聞く

「・・・したがって印章術とは、体内の魔力を印章によって形作り、作用を発現させるというものだ、つまり印章は魔力を加工する型のような物である、例外としては・・・おっと時間のようなだ、次からは大まかな印章の分類と、個人の適性についての講座を開く、以上」
教授は時間きつぱりで、講堂を出ていく

「ふうー、疲れる」

いつの間にか起きていたクライブが、目頭を押さえる、

「お前が言っなよ！」

と寸分違わぬつつこみをクライブに見舞う

講義を終えて食堂で昼食を食べる、例によってがつつくクライブを

見る

「いや旨い、これはなかなかもが・・・」

カイルはふと思う、自分はこれから立派な騎士になれるのだろうか？
多少は魔法が出来るといっても、やはり騎士というのは戦う職業だ、
自分のような貧弱な輩

今更ながら向いて無いんじゃないかと思う、カイルは自分の体を恨む
「どうした？、食わないのか？」

「クライブはいいなー、体が大きくて」

「ん？まあ俺はいっぱい食っていっぱい寝てるからな、でも俺はお
前が羨ましい時もあるんだぜ」

「えっ！そうなの？」

「お前頭いいだろ？、俺もあんなに勉強できたらなーとか思ったり
するんだ、人は万能じゃないんだからいいんじゃない？」

カイルはありがとうと言おうとしたが、なんだか照れ臭い気がした
「そこであれなんだけど、罰の道具整備でつだって」

カイルは、大きなため息をついた「しょうがないなー」

二人は昼食を終え、兵練所に向かう、兵士練所には誰もおらず、吹
き抜ける風と二人の足音以外は聞こえ無い、用具室には訓練に使う
木刀やマネキン等が雑に並んでいる

二人は割れたマネキンや破れたグローブを直していく

「まとめて新米に整備させるつもりだったんじゃないか？」

「ほら口より手を動かす」

カイルはてきぱきと道具を仕分けをする

「クライブ、ナックルガード取って」

「これか？」

「サーベルのやつだから・・・丸いやつ」

クライブは用具箱を探す

「えーとこれも違うし・・・無いみたいだな」

クライブは用具室の奥に行く

「クライブー、ありそう？」

「これでもないし・・・うおっ!!」

どてんと大きな音がする

「どした、クライブ?」

カイルはクライブを見に行く、するとクライブが仰向けに倒れていた

「ク、クライブ?」

つんと鼻をつく臭い、瓜類のような油のような異臭、クライブはパ
クパクと口を開き

「臭撃者・・・ぐ」

というと気を失った、カイルは直ぐさま近くの木刀を手取る

木刀とはいえ重さも長さも有り、急所に当たれば無傷とはいかない、
カイルは木刀を構える

「どこだ・・・」

後ろで何かが擦れる音がする、すぐ後ろを向くと黒い何かが飛んで
くる

防御には成功したが、衝撃で少しよろける

「亀甲虫・・・」

黒く硬い甲羅に身を包み、強力な神経毒を含んだ液体を飛ばしてくる
もつとも、毒が回るまえにその強烈な臭いで気絶することが多い、
という二つの意味で恐い虫だ

たあ、と縦に木刀を振り下ろすが、傾斜のついた甲羅により剣がそ
れる

「き、効かない」

その時亀甲虫の口が開かれた、危険を感じたカイルは、飛んで来た
毒液を横によける

「くそつ、何か無いか?」

使える武器を探す、見つけたのはウォーハンマー

戦闘用に改造された大型武器だ、それをとる為転がり手に取る

「こい、カメムシめ!」

カイルは構える、武器の重量から考えて勝負は一回、
引き付けてから一撃を見舞う、カサカサと亀甲虫は近付く

横薙か？それとも打ち下ろしか？、間合いは十分

「臭いのは・・・ゴメンだぁぁっ！！」

選んだのは打ち落ろし、亀甲虫が口を開く前に全体重をのせた一撃を与える

横薙ぎと違って打ち下ろしは力の逃げ場が無い、したがって鋭さの無い純粹な破壊力はそのまま甲羅を通し

内臓器官に深刻なダメージを与える、亀甲虫はギツ、と鳴き声を上げて動きを止める

「ゼーはー・・・ゼーはー」

カイルはよたよたとクライブに近寄り、鼻を押さえながら運び始める

臭いクライブを処置室に置いた後、クライブは少女の元へ向かう、片付けやらなにやらで外はもう暗い

カイルは昨日の道をたどり暗い路地へと入る、やはりそこは暗く、魔力を失いかけた輝石が、心細く辺りを照らしていた

「いる？」

カイルは昨日の小窓に声をかける、少しの間の後少女は答える

「・・・いるわ」

カイルはその声を聞くと壁にもたれて楽な姿勢をとる

「よかった・・・じゃあ何から話そうか、ええと・・・」

「アリア・フェルミナよ」

「僕はカイル・ブレフォード」

「カイルさんですか、ステキな名前ですね」

「さんはいらないよ、なんか話していると他人みたいに感じるから嫌なんだ」

「わかった、じゃあカイルって呼ぶ事にする」

「うん、僕もアリアって呼んでいい？」

「ええ」

それから二人は他愛のない話しをする

「じゃあ、貴方は聖国騎士に入団したの？」

「うん、今はここにいないけどクライブって奴と一緒に所属してる」
「すごいわ、貴方はとても屈強な人なのね」

カイルは心の中でうつ、とうめく

「と、ところで今度みんなでご飯食べないか？、さっき言ってた筋肉バカも合わせてさ」

「それは……」

アリアの声が曇る

「どうした？、嫌だった？」

「いえ、私はこの家から出られないの」

「まさか、まだそこに捕まっているの？」

カイルが慌てて聞く

「いえ、もうそれは大丈夫」

「じゃあなんで？体が弱いから？」

アリアは悲しみを含んだ声で話す

「私、小さい頃から家に閉じ込められるの、義理のお母さんは、私があるお方の血を引いてるって」

「そんな……一度も出た事が無いなんて！」

カイルはアリアが可哀相でならなかった、一度もあの暖かで、優しい日の光をその体に受けたことが無いと知ったからだ

「出たいとは思わないの？」

「もし、私が外で何か危険な目にあったら、お母さんに迷惑が掛かってしまう、それにお母さんはとても優しいし、不自由は無いわ」

カイルは目をつぶる、背中越しにアリアの事を思う

「そうだ、いっぱい話したし、小腹が空かないか？」そう言うとかイルは、もってきたカバンから丸いパンを取り出す

「昨日パンを貰ったんだけど、食べる？」

「いいの？」

「パン位いいさ、窓に届く？」

「台を使えば」

カイルはパンを半分にして、窓に背伸びする
「よっと」

パンを手渡す時、カイルの指とアリア細いの指が触れる
アリアは一瞬ピクツ、とためらうようなそぶりを見せたが、しつかりとパンを掴む

「ありがとう」

二人はしばしもぐもぐと口を動かし、パンを食べる

「ふー、水無しじゃ少しきつかったかな」

「いえ、美味しかった」

カイルは月を見上げる、冷たいがどこか安らぎを与える青白い光

「カイルさん、本当にありがとう」

「ん、どした？いきなり」

「泣いている私に声をかけてくれたり、こんなに色々な話をしてくれたり」

「いや、僕も新しい友達が出来てうれしいよ」

「私が友達？」

「あつ、迷惑だった？」

「うっん、何て言えばいいのかな」

アリアは急に涙っぱい声になる

「え？、ええっ？」

「ごめんなさい、つい嬉しくて・・・私外に出た事無いから友達がいなくて」

「そうか・・・」

カイルはなんだか照れる

「でもごめんなさい、顔すら合わせられないなんて」

「しょうがないよ、この家、なんか窓少なそうだし」

その時アリアの後ろから女の声がする

「アリアー、どこにいるのー」

「カイル、ごめんなさいお母さんに誰かと話してるのがしたら大変」

「わかった、じゃあまたね」

カイルはそう言うと、足早に教会に帰る

カイルは教会に到着、夜遅くに出入りして怒られると思ったら、以外とルーズ

道中で先輩方が、酒ビン持っではしごしてた位だから、まあ自分は問題なかつたと見当つけていた、クライブが気になり、医務しつに向かう、中にはクライブはおらず、けるつとして帰ったと言われた、処置室のみならず医務室全体が、あの忌ま忌ましいカメ公の臭いで一杯だった

続いてクライブの部屋に向かう、ノックをしたが耳を澄ますと返事が返ってくる、ぐがーとかぐぐーとか言う返事だ

「はやいなー、寝るの、人が心配してるってのに」

カイルは少し安心した、安心ついでに眠気が襲う

「眠っ、早く寝るか・・・」

カイルは自室に帰り眠りにつく

カイルは目が覚め起き上がる、昨日の筋肉痛は殆ど無くなり、普通に動ける

「今日は模擬戦か・・・治ってよかった」

カイルはクライブを迎えに行く、部屋の中はまあ多少は臭うが気にはならない、昨日と同じく食堂へ向かう

「いやー、臭いのせいで食事が喉を通らねえ」

と言いなから、パンをバリバリ

「に、臭いが・・・」

とやはり気になり、ちびちびと食べるカイル

「いけねえな、ああいけねえ、ダチに向かって臭い、なんてひでえ奴だ」

「ごめん」

といいつつ心で

「やっぱ無理」と、口と心の二重放送
腹ごしらえを終え、二人は兵練所に向かう、中ではもう準備が終わっていた

「カイル、俺達遅れてる」

二人は急ぎ甲冑を着る、着替えが終わり列ぶと、もう教官が前にいた
「えー、これから模擬戦闘訓練を行う、実戦の感覚に近い訓練になるだろう、ルールは二つ、相手に降参させるか、戦闘不可能と判断された場合に勝利とする、方式は勝ち抜き戦だ、今回の模擬戦闘は、お前達の技量を見る為のものでもある、では始めてくれ」

そう言うと、教官は審判席に戻る

「いやー楽しみだな」

クライブは肩を回す

「あんまり痛いのは好きじゃないけど、これも聖騎士への道だからなあ」

こうして模擬戦闘訓練がじまった、二人は控えのテントに行き、場所を確保した、勝ち抜き表ではクライブの試合はすぐだ、カイルはその後のようだ

「クライブがんばってね」

「おう、行ってくる」

クライブ兜を被りは第一コーナーに向かう

審判らしき男がコーナーに近付く、階級章をみると十字架に銀の羽があしらわれている、白騎士のようだ

「両者、準備はいいか？」

「準備完了です」

「おう、いいぜ」

白騎士はこほんと咳をしてクライブを見る

「では・・・始めっ！」

クライブの相手は間合いをとり構える

男の右手に刻まれた聖国の印章が光る、ホーリーアローだ、負担が少なくスピードもある

「じゃらくせえー!」

クライブは、なんとホーリーアローを剣で弾き飛ばした

男は驚きの声を上げる間も無く、助走をつけた一撃で倒れる

「・・・し、勝者クライブ・オルディナント」

余りに一瞬の出来事で、審判は遅れて判定をだす

クライブが余裕の表情で控えのテントに戻る

「さすがクライブ!」

「いやいや、でもなんかあっけなかったな」

審判席付近の係員は、勝ち抜き表に書き込む

「えー第二試合の・・・」

その時、兵練所の扉が勢いよく開かれる

審判員はぼうぜんと見入る、兵士のなりをした男は鬼教官の元に向

かい、耳打ちをした

「クライブ、あれなんだろ?」

「さあな」

鬼教官は兵士の話を聞いていたが、かつ、と目を見開く、周りの

騎士達がざわめく

鬼教官は兵練所の真ん中まで来ると、大きな声で叫んだ

「諸君、模擬戦闘訓練は一次終了、追って連絡があるまで自室に待機せよ」

周りの混乱をよそに、鬼教官は周りの上級騎士に指示を出し、その
ばを去る

カイル達は訳が分からずに自室へ戻る、もう夜だ

「一体なにがあっただろう・・・」

カイルはベットに腰掛けて考えつく限り考えた

「カイル、開いてるか」

「クライブ?」

ドアの向こうから聞こえてきた声はクライブだった

素早くカイルの部屋に入ると、カイルの近くにあぐらで座る

「見つかったら懲罰だよ」

「ああ、わかってる」

クライブは一息つくと話しをきりだした

「気にならないか？」

「えっ」

「会議室でやってるらしい」

カイルは悪い予感がした

「まさか！」

「盗み聞くんだよ」

「それはヤバイ、ばれたら大変な事になるって」

「大丈夫、大丈夫外からやれば行けるって」

確かに外は暗い、夜陰に紛れば行けそうだ

「気になるけど・・・」

「よし、行こう」

「ちよっ！」

カイルはクライブに引き連れられロビーに差し掛かる

「ちっ、門番がいるな」

「クライブ、やっぱり戻った方法がいいと思うけど」「そこから行

こう」

クライブは窓を指指す

「・・・ここまで来からには覚悟決めるよ」

二人は窓を開け、そこから外へでる、しばらく歩くと大きな窓から光が漏れていた

「・・・は今回の任務を申し上げます」

クライブとカイルがそつと窓に耳をつける

「ちよつと待て、人払いは出来ているだろうな？、もし聞かれたら麻袋が必要になるが・・・」

カイルとクライブは心臓が飛び出そうになる

「で、では今回の任務を申し上げます、今回の捕獲目標はアリア・

フェルミナ一名、帝国密偵に奪取されるまえに確保するという任務です、なおなんらかの問題が発生して帝国もしくは第三者に目標がわたる事を、いかなる手段を用いても阻止せよとの事です」

「殺してでもか？」

「やむなき場合は」

カイルは震えた、怖いからではない、昨日友達になっただけのリアが

もしかしたら殺されてしまうかも知れないからだ

「カイル？どうした？」

「行かなきゃ」

カイルは駆け出した、自分の部屋から必要最低限の物をバックに入れて、教会から飛び出す

「おい止まれ、どこに行く」

門番の抑止を気にも止めず、アリアの元に向かう

走っている途中で雨が降り始めるアリアの家に着くとドアが開け放たれていた

中に入ると怒鳴り声が響く

「帰って下さい、なんなんですか貴方達は！」

「アリアを渡して貰おう」

カイルはぎりりと歯を噛み地面を蹴る、奥に進むと男が二人、カイルは持つて来た剣で、男の頭を、柄で殴る

もう一人の男は腰を抜かす

「うわ、助け・・・」

カイルはそのまま剣を向ける

「さっさと消えろっ！！」

何時にない気迫を込めた一言に、男は逃げうせる

「貴方は？」

アリアの義理の母と言うのはこの人だろうか？

「私の名前はカイル・ブレフォード、聖国騎士団の者です」

「そう！、それはよかった聖国騎士団の方なのね」

「アリアさんはどこでしょうか？」

アリアの母は怪訝な顔をする

「なぜその名前を？」

「時間が無いので詳しくは話せませんが、アリアさんは聖国と帝国の両方に狙われているんです」

アリアの母は一瞬驚いたがすぐに理解したようだ

「そう・・・分かったわ、こちらへ」

そう言うとカイルを奥の部屋へ案内する

「アリア、入るわね」

ドアを開けると一人の少女がベットに座っていた

「お母さん・・・その人は？」

「カイルさんよ、今は時間が無いの、カイルさんと一緒に外へ逃げなさい」

「外？、だって私外には・・・」

「ごめんね今までこんな所に閉じ込めて、あなたはいつも大人の犠牲になって・・・可哀相に」

「どうしたの？」

アリアの母はアリアを、抱きしめる

「そろそろ」

「ええ、わかつてる、さあアリア行きなさい」

「はい・・・お母さん」

アリアはカイルの後ろに控える

「カイルさん、この家には隠し通路があるんです、この通路を抜けた後そのまま南に進んで、モルグという港町に進んで下さい、そこからさらに南西の方向にリトニアという大きな町があります、そこ
の図書館の館長にあって下さい、必ず助けてくれるはずです」

「わかりました」

「あの・・・」

「何ですか？」

「アリアをよろしく願います」

そう言っと、アリアの母は深くお辞儀した

「さあ行こう、アリア」

「はい」

カイルとアリアは、隠し通路に入る、中は埃っぽくカビ臭かった

カイルはバックから輝石を取り出し、壁に打ち付けて明かりを燈す

「足元、気をつけてね」

カイルはそれ以上何も言えない、二人は黙々とすすむ

しばらく歩くと、外に出た

「雨・・・止んでないけど行こうか」

カイルとアリアは、静かにふる雨の中ひたすら森の奥に進む、アリアが口を開く

「ごめんなさい」

「何が？」

「だって私のせいで、貴方は巻き込まれたんでしょう？」

カイルは歩みを止めずに答える

「なんか止まらなかったんだ」

「えっ？」

「君が危険だつて聞いたなら勝手に体が動いてさ、もしかしたら僕が事を大きくしたのかも知れないだから・・・」

突然茂みから兵士が飛び出る

「アリア、離れて」

兵士は短く詰められた剣で斬りつける

「くっ・・・」

カイルは避け切ったが、相手は続け様に攻撃してくる、押されるカイルは

大きく後ろに跳ぶ

「行けっ！！」

カイルはホーリアローを放つ、相手は避けるが不意の魔法にバランスを崩す

「があああつ！！！！」

カイルは狂ったように突っ込む、突き立てた剣から血が伝う
カイルはゆっくりと剣を抜き、鞘にしまう

「行こう、近くまで来ているみたいだ」

次々と松明の火が増える、大規模な待ち伏せだ

カイルとアリアはひたすら走る、どのくらい走っただろうか、松明はもう見えない

「はあ、はあ」

「もう・・・来ないみたいです」

「あそこで休もう」

雨がさらに強くなる中で、幸運にも小屋をみつけた、暖がとれるのが幸いした

「火を着けようか」

カイルは近くの火打ち石で火種に火を着けようとするが、湿っているので着かない

「あれ？つかないな、アリアちょっと待ってて」

「大丈夫よ」

アリアは激しく震えている、カイルは上着を脱ぐ

「アリア、濡れた服を脱いで」

「それだと貴方が寒いじゃない」

「いいからこれ着て、あっち向いてるから」

カイルは服を手渡し、暖を取る為、バックから色々探す

「あった、これでやっと暖が取れそう」

小さな火が、ポツとつく

「さあ、アリアようやく・・・」

見るとアリアは、カイルの服に包まり寝ている

「疲れたんだな」

カイルは着いたばかりの火に体を向けて眠る

「イル・・・ん・・・カイルさん」

カイルは揺さぶられて起きる

「朝……」

カイルは辺りを見回す、昨日の火はもう消えている、カイルの顔に朝日が当たる

「外を確かめよう」

カイルは外を警戒するが、人の影は無い

「良さそうだな、外に出ようか」

カイルとアリアは外にでる、さんさんと降り注ぐ太陽があつた

「わぁー、これがお日様かぁー」

アリアは陽光を浴びる、あのどこにでもある太陽を、カイルが何気無く浴びてきた太陽をとて喜びながら

カイルは日の光のしたで

いつまでアリアを見ていた

第一章 白いその手に太陽を（後書き）

今回は話しが急展開しましたねー、私の文章力の低さがぼろりとしてなければいいですな、私の名前はある作家さんから、勝手に借りしてるものです、その作家さんの爪垢にすら及ばないのですが、リスペクトしておりますゆえにこんな名前です、はい、そゆことで皆さんこれからもよろしく願います

第二章 ワダツミノウタ（前書き）

今回の作品は非常に痛い、と思うかもしれませんが、否、痛いですが
なり、恋愛描写はかなり苦手なので許してください

第二章 ワダツミノウタ

カラリと晴れた空、昨日の土砂降りと打って変わって、実にいい気持ち

「すいません、モルグはこちらでいいんですか？」

二人は街道を南に進んでいた、途中行商に道を尋ねる

「ああ、あつてるが・・・、あんたたち何かあったのかい？」

カイルはズボンが泥だらけの軍服に身を包み、アリアは服が濡れていたので、カイルの軍服を着て

下は黒のスカートという何とも変な組み合わせ

「あ、ありがとうございます」

二人はそそくさと先に進む

「何か私達目立ちますね」

「うん、早いところ着替えないと」

いくらか進むと、街道の近くに白い花が咲いてた

「あ、これフィラの花だ」

「どれ？」

アリアはしゃがみ込む

「絵でしか見た事無かったけど、やっぱり綺麗」

そつと摘み取ると立ち上がり、観察しながら進む

「確かに綺麗だね」

「これは綺麗なだけじゃなく、殺菌消臭作用もあるの」

カイルは不安になり尋ねる

「もしかして、僕の服、臭い？」

「いえ、あなたの服、とてもいい匂いです」

アリアは言ってしまったから、しまったと思う

「よかった・・・って、アリア？何やってるの」

アリアは恥ずかしいさの余り、顔を隠す

そうこうしてるうちに、港町が見えてきた

「アリア、あれじゃないか？」

「そうみたい、カモメも飛んでる」

二人が町に入ると、潮の香りがしとカモメが出迎える

「まずはこの服だね」

二人は旅人向けの洋服店を見つけた、少し寂れてはいるが贅沢は言えない

「すいませーん」

カイルは叫んだが長らく返事は帰って来ない

「あのー、買いたいんですがー」

何もする事が無いアリアは店を眺める、奥行きのある店内は、幾つかのオレンジの輝石で照らされている

ずらりと並んだ服は、右側が婦人服、左側は男性服となっている、壁の商品棚は手の届かないような高さまで均一に間隔を開けて造られている

本棚のようだ、そこには様々な形や色の帽子が飾られているが、埃は被っていないようだ

「凄い数ねー」

「アリア、なんかいないみたい」

「そう、残念ね」

二人が帰ろうとした時、一番奥の扉が開いた

「いらしつしやい」

出て来たのは高齢のおばあちゃん、曲がった腰に

質素な杖、白い帽子を被っている

「あ、よかった、僕達服を探してて」

「御自由に」

そう言うのと近くの椅子に座る、このお婆ちゃんと同じ位の時間を、共有して来たであろう、クッション部分が緑の丸い椅子だ

「どれにしようかな・・・」

「えーと、これもいいしあれもいいわ」

二人は無尽蔵の服と格闘していたが、結局選べずにいた

何とも優柔不断な二人であった、そんな二人にお婆ちゃんはニコニコしながら言った

「私が見繕いましょうか？」

「いやーすいません」

「お願いしますわ」

お婆ちゃんはゆっくりと服を選び始めた、最初から決まっていたのか、迷う事無く選り終わる

「はい、お二人にぴったりの服を選びましたよ」

お婆ちゃんはゆっくりと腰掛ける

「アリア、着替えよう」

二人はそれぞれ試着に入り、着替える

同時に試着室から出て来た二人は声を上げる

「おー、かわいいね！」

「カイルも似合ってます」

カイルはダークグレイのシャツの上に、ベージュを基調とし、濃いブラウンでアクセントを加えたジャケットを着る

ジャケットにはポケットが多数ついており、機能性とデザイン性を高めるてくれる

下には淡い青のカーゴパンツをはく、何とこのカーゴパンツは、暑い時に膝についてあるチャックを開く事で、半ズボンにする事が可能である

アリアは、若草色のワンピースを着ている、ひざたけ10センチ下程の長さで、ひらひらがついており女の子らしさをアピール

その上に羽織るのは、白いシフォンブルゾン、軽やかで柔らかな雰囲気を与え、ワンピースの清楚さをまとめる、履いているサンダルはシンプルで主張しないので、コーディネート崩さない

「あらまあ、皆さんとてもお似合いですよ」

お婆ちゃんはやりにここに、だがカイルは気付く、お金たりない！

アリアも幾らかお金を持ってきたと思うけど、もともと自分は苦学生だったので、今あるはずがない

「なあ、アリア・・・その・・・」

アリアは鏡の前でくると回ったり楽しそうだ、アリアの服もお金持ちの娘が着るような服だろう

二人合わせて12万ニル位だろうか、もっとあるかもしれない
カイルはアリアを呼んで会計を聞く、アリアはがっかりするだろうけどしかたない

「そうだねえ・・・1300ニルでどうかねえー」

「えっ!？」

カイルはその安さに驚愕した、がそこでアリアがとんでも発言

「少し高くないかしら？」

カイルはマツハでアリアの方を向く

「アリア、これって爆安だよ、ていうかこんなお婆ちゃんから、これ以上ぼったくったら犯罪じゃないかな」

カイルは真顔で迫る

「ご、ごめんなさい、私ったらお金に関しての常識がないから・・・」

カイルは再びお婆ちゃんの方を向く

「いいんですか？こんな値段で」

お婆ちゃんはコクリと頷く

「もう少して私の子供と一緒に暮らす事になってね、ここを離れるんですよ」

「そうなんですか？」

「ええ、子供が言うにはこんな寂れた港町は嫌だって言うんですよ」
カイルはこの町に来た時を思い出す、町というには人が少なく、村と言う方があっていた

「ここを離れる時、この子達を業者に叩き売りするんですよ、だか

「少しでも大事に着てくれそうなたたちにと思ひましてね」

お婆ちゃんは優しい目で店の服や帽子を見る

「だから大切にやってください」

二人は頷くと、店を後にした

「いやーお得な買い物したなー」「そうですね」

二人が表通りに差し掛かる

「アリア、止まって！」

「カイルさん？」

「聖国だ・・・」

カイルとアリアは身を潜める

「では、この人相に心当たりはないですか？」

聖国兵は紙を町人に渡す

「・・・しらねえな」

「そうですか、ではこちらの人相書きを酒場にお願ひします」

そう言つと、兵士は紙その場を後にする

「もう人相書きが回つてる・・・」

「色々あつて聞けなかつたけど、何があつたのか教えて」

カイルは周りを十分に警戒しながら歩きだす

「よし、あの酒場で話そう」

二人は一軒の酒場に入る、中は荒くれ者達で溢れていた

下品な笑い声や大漁節が響く、

「凄い人のりようだな」

「え、ええ・・・」

酔つ払つた大男が二人の前に立ち、ジョッキの酒をあおる

「おう、ここはガキが来る所じゃねえぞお、ガッハツハ！」

アリアはカイルの後ろに隠れ、袖を掴む

「おいおい、つれねえーな」

男はドカドカと足音をたてて店の奥に行く

「大丈夫？」

「ええ、男の人は何だか慣れなくて・・・」

カイルは店の一番奥を選び向かう、アリアは席に着くまでカイルの袖を離さなかった

「ようやくゆつくりと話せる」

カイルは息を吸う

「前にも話したように、僕とクライブは聖国騎士団に合格、そして入団して間もなく、不穏な動きがあった」

「それは？」

「アリア、君を拉致監禁するというものだった」

「なぜアリアを連れ去る必要があったかは僕にもわからない、でも君は帝国と聖王国のどちらからも狙われているんだ」

「そんな・・・折角自由を手に入れたはずだったのに」

アリアの顔が不安と絶滅の色に変わり、俯く

「僕が守る」

アリアが顔を上げる

「アリア、君は僕が絶対に守る」

その力強い声と、真つすぐな瞳は、アリアの心の黒い影を瞬く間に打ち払った

「何故そこまでしてくれるの？私の為に、夢も友達も置いてきて、しかも危険な目に会う事もわかっていたのでしょ？」

カイルは腕を組み考える、そして答える

「僕は騎士であり続けたいんじゃないじゃ無くて、より多くの人を助けるため、騎士になりたかったんだ」

「まあ、少しはかっこいいからっていつのもあるけど」
「ふふっ」

二人は微笑み合う

「おーおー、妬けるなあお前ら」

突然横槍が入る、話しかけてきたのは、いかにもがらの悪い男
他にもお仲間が2〜3人ほどいる

「そっちの子、中々いいじゃん？、酒ついでくんねーかなー」

アリア少し怖くなつて下がる

「あ、あのー、すいません、アリアも怖がってるのでやめて下さい」
後ろのピアス男が前に出る

「ハアー？野郎に用はないんですけどおー」

男はカイルを押し退け、アリアに迫る

「だからアリアが・・・」

そう言いかけるとピアス男は、カイルの顔を殴る、殴られたカ
イルは床に転がる

「カイルさん！」

「あーあ、カイルちゃんが刃向かうから、手が痛いなー、アリアち
ゃん、高いよ？」

ピアス男がアリアに迫る、するとカイルは布に包んだサーベル
を手にとり、立ち上がる

「僕に剣を抜かせないで下さい」

場に緊張が走る、男達はそれぞれ手に得物を持つ、がすぐにそ
の緊張は解かれる

「てめーらぁー！！！！」

突如現れた少年が、がらの悪い男を、跳び蹴りで吹き飛ばす

「てめー、やりや」と男が何か言う前に、その少年はピアス男の足
を払い

みぞうちに、かかと落としをする、残りの男は逃げ出す

「あつ、てめえ！」

逃げた男は出口近くまで逃げる

「捕まつてたま・・・うあつ！？」

男は逃げ出す一歩手前で、大きな影に遮られる

「けじめはきつちり払いな」

その大きな影は、男を押さえつける、酒場に入った時に話した男だ

「おうレックス、ちゃんと仕留めろよ」

大男はまた酒をあおる

「おっさん、また世話になったな」

「ばっかやろー、ガントおじさまって言え」

カイルは剣をおく

「すみません、助けていただいて」

アリアもお辞儀する

「オレはレックスって名前だ、ここで働いてる、そのおっさんはガント、漁師やつてる、まあほとんど酒ばっかだけど」

「わしの出番をとるな」

「僕はカイル・ブレフォード、いまは・・・パン屋です」

「私はアリア・フェルミナ、お、お花やさんです」

「ぐ、ぐるじい」

「おっと、マスター縄くれ」

男を縛り上げた後一段落、みんなで座る

「っていうと、カイル達は聖王国からの旅行者で、リトニア観光の道中ってことか」

「はい、そうなんです」

「なあおっさん、リトニア・・・ってまたかよ」

ガントは爆睡している

「まあ、いいや」

アレックスは豆をつまむ

「じゃあそろそろ僕達行こうか」

カイルとアリアは、嘘がばれないか心配でならない、早くこの場所を離れたかった

「なあ、あんた達、嘘ついてるっしょ？」

カイルはいきなり凶星をつかれる、なんとか動揺を隠す

「嘘なんてついてないよ」

「じゃあ、なんでパン屋のあんたが聖国騎士団の印の入ったサーベルを持つてるんだ？」

「それは・・・」

「しかも、最近人を斬っただろう？柄に血が拭き残ってるぜ」

カイルはピクン、と震える

「あんたがもし、とんでもねえことしたなら、この町で同じ事をしないと限らない、正直に話してくれねえか？」

アリアはカイルに頷く

「では、誰にも話さないと約束して下さい」

「場合によるけどな」

カイルはいきさつを話す、自分とアリアの事

帝国と聖国に狙われている事など事細かく説明

「・・・という事で、私達はこの町に来たんです」

アレックスは真剣な顔付きで、腕を組んでいる

「つまりは【愛】ってやつか」

「へ？」

アレックスは腕を組みながらうなづく

「自分の夢を捨て、このこの為、危地に飛び込むとは・・・顔に似合わず、漢だね」

アリアは顔い赤くしながら腕をふる

「だだだ、だからこれはそんなじゃ無くてですね・・・」

カイルは顔を輝かせる

「そう【愛】です！」

アリアはドキッとする

「これは友愛と正義です！」

「うわ、つまんね、そっち系か」

アリアはほっとしたが、どこか残念な気がした気がする

「所でさ、もう少しここに残らないか？」

アレックスが思い掛けぬ提案をだした

「リトニアは首都だ、多分警戒が厳しい、ほとぼりが冷めるまでここにいたほうがいい、それに近い内に祭があるんだぜ！」

「確かに、でも大きな問題が・・・」

カイルとアリアが顔を見合わせる

「私達、お金がないんです」

カイルとアリアはほぼ一文なしで飛び出したのだ、それを聞いたアレックスは思案する

「よし、家に泊まったらどう？」

カイルとアリアは驚く

「いいんですか？」

「いいも何も、一軒だけの宿屋はつぶれちまったしな」

「アレックスさん、ありがとう」

アリアは御礼をする

「可愛い子は大歓迎！」

アレックスは快活に笑う

「じゃ、行こうか」

アレックスは二人を案内する

「ぐがああぐつ、んー・・・アレックス？・・・まあいいか」
ガントはまた眠り始めた

アレックスに連れられ、カイルとアリアは道を歩く

あちこちで、網やボートや浮きがちらほらと見当たる、船置場には貝や魚の生けすがある、

「アレックス、やっぱりここらへんの魚は美味しいの？」

「当たり前だろ？、魚以外にもダホ貝が美味しい、炭火焼きか生がお勧めだぜ、俺は一夜干しが1番だけだな」

アレックスは少し歩くと一軒の家の前で止まった

「ここがオレン家、入って」

二人はアレックスの家に入った、中は質素な内装だが綺麗に掃除し

てある

「母さーん」

「アレックス、叫ばなくても聞こえるって言うてんでしょ」
奥からアレックスの母が出てくる、歳は結構若い

「あら、この方々は？」

「さつき酒場で会ったんだよ、泊まりたいけど宿屋潰れちまつたろ？」

、泊めてやろうと思ったから連れてきた」

アレックスの母は、アレックスにげんこつする

「いってー、殴んなよ！」

「あんた！会ったばかりなんでしょ？泊めてやるなんて偉そうな事
言わない」

「じゃあ駄目なのかよ？」

「そんなこと言つて無いでしょ、すいません家の子が」
アレックスの母が頭を下げる

「いえ、アレックスさんには、酒場で怖い男の人達から助けて貰っ
たんです」

そういうと、アリアはお辞儀する

「なっ？」

調子に乗ったアレックスを母がこずく

「何にせよいらっしやい、ほらアレックス、お客さんに部屋を案内
して」

「わかつたつてば」

アレックスは母に押されて、二人の荷物を持ち案内する

「部屋狭くてごめんな、今こしか泊められそうにねーし」
部屋には大きなベットとサイドテーブル

小さなランプが一つ、アレックスは二人の荷物を隅に置く
「じゃあ飯ができるまで待つてて」

アレックスは部屋のドアノブに手をかける

「アレックス、アリアの部屋は？」

「いや、だから部屋さここしか無いって」

アリアは、はつとした、まさか男の子と一緒にの部屋？

「でも、私女の子だし・・・」

「大丈夫だって、ベットは大きめだから体はつかないよ」

そんなには、と付け加えアレックスはニヤニヤしながら出て行く

「僕が床に寝るから大丈夫」

カイルはシーツと枕を床に敷き始める

「いや、あのつ、大きめで大丈夫だと思います」

アリアは流石にここまで守って貰って、カイルは床で自分がフカフカベットは酷い気がした

「え？でも男の人にがてなんだよね？」

「あ、あなたとなら寝ても大丈夫です」

たしかに本当の事だが、聞く人が聞く人なら大変な勘違いをしかねない

「そう？、ならいいけど・・・」

カイルはそっち方向には考えなかったらしい

「た、試しに寝てみましょう」

アリアはさっきの言い間違いの恥ずかしさで、頭が茹だっている

「まだ早いし、ご飯もまだ・・・」

「いいから早く来なさい！」

完全に暴走している、カイルは変な迫力に押される

「は、はい」

二人は微妙ーな空気でベットに入る

「ど、どう？」

「くつついて無いみたいだけど」

二人は背中合わせにベットの中で話し合う長い、沈黙が流れる
変な雰囲気堪らず、同時に振り向くと、ぶつかりそうなほどに顔が接近する

「あ・・・」

アリアはカイルの顔を見つめる、カイルは歳の割りに幼い顔付き

整った鼻と大きな目、小動物系といった印象を受ける

「お二方、もう飯はできてたから来いってさ」

そこでタイミングよくアレックスが登場

「・・・・・・」

カイルはやったご飯だ、と嬉しそうに起き上がり、アリアは真っ赤な顔をし、アレックスは無表情で食卓へ向かう

食卓についた四人は食事を始める

「これ美味しいですね！」

「そうでしょ、和えるソースに秘密があるのよ」

カイルとアレックスの母は結構話しが弾む

アリアはさっきの出来事で頭がいっぱい、刺したジャガ芋を落としたりしてる、アレックスは今だ沈黙

「アリア、なんか変だよ？」

「そんな、事、ない」

「そうならいいけど、言葉がぎくしゃくしてるよ？」

そんな二人の話を聞いて、アレックスは口を開く

「まだ日暮れ前だと言っのにねえ」

アリアのジャガ芋が上に飛ぶ

「な・・・・」

カイルの頭にカレー味のジャガ芋が飛来

「うわぁ！」

「アレックス、おっしゃいなさい、何があつたのか事細かく」

「はい、母上」

アレックスの母も悪のりする

「あわわわ」

「私、アレックスが少しの間、ほんの少しの間目を離したら、まあ仲のいいこと」

「だって、友達だし・・・変？」

流石カイル、鈍さが存分ににじみ出る

「どんなに仲がよかったのかしら」

「それはもう・・・」

アリアはアレックスの口を塞ぐ、カイルはそんな様子をよそにアレックスの母に尋ねる

「あのすいません、こちらへんで、何か仕事はありますか？」

「仕事かー、酒場ならアレックスで間に合ってるし・・・、剣は使える？」

「あ、はい多少は」

「じゃあ、漁師達の護衛をお願いしたいんだけど」

アレックスは身を乗り出す

「それは危険だって、鱗さまの洞窟は魔物だらけだし」

「大丈夫、少し位なら魔法も使えるし」

「まあ、そういうなら仕方ない、危険だぜ？」

「ああ、ありがと」

「アリア、もうジャガ芋飛ばさないでね」

アリアはコクリと頷く

「さっさと食っちゃおうぜ、冷める前に」

四人は晩御飯を平らげる、アリアは何回かさっきの話を掘り返す

アレックスの口に芋を詰める

「あー食った、ていうか食わされた」

アレックスが腹を叩く

「ごちそうさまー」

「おさら、私も洗います」

「いいのよ、私がやつとくから、変わりにアレックスを使うわ」

「えー面倒臭え」

「あんたが案内したんだから、あんたも増えた分やりなさい」

アレックスの母はアレックスを引きずりこむ

「あ、二人とも風呂に入ってもいいわよ」

そういうと奥に消える

「今日は疲れたし、早めに風呂に入って寝よ」

カイルとアリアは風呂に入った後、寝室に向かう

「疲れたね、壁側とこっち側のどっちがいい？」

「えーと・・・」

カイルはアリアの戸惑いを察知する

「無理はいけないよ、やっぱり僕が床に」

「いえ、外側で」

そういうと、アリアはカイルをベットに押し込め、ランプの光を消してからベットに入る

「あー、眠い、アリアお休み」

「お、お休みなさい」

お休みと言ったが、アリアは緊張して寝れなかった

いつまでもそわそわしている、月明かりはアリアの薄紫の髪を照らす

「アリア、起きてる？」

「はひっ！」

アリアは突然呼ばれて驚く

「あの森で僕は、殺さないといけなかったのかな？」

アリアは家を飛び出した時を思いだす、暗がりから襲って来た兵士を、深く剣で突き刺したのだ

「あれは突然だったから・・・」

「そう、突然だった、でも僕が冷静であつたら、正しい対処してたら死ななくてすんだかもしれない」

アリアは何も言えなかった、確かにあの兵士は死んでしまった、危めたのはカイル

だが、襲い掛かるベテランの兵士相手に、騎士に成り立てのカイルが加減して勝てただろうか？

あまつさえ、自分を守る為に立ち向かったカイルに悪いと言う事は出来ない、誰かが悪いといえば、原因となった私かもしれない

アリアは月明かりの中、カイルの肩に手をかけて励ましたかった、でもどうしても月光と暗闇の間を越える事はできなかった

カモメの鳴き声と朝日にアリアとカイルは目を覚ます

「アリアおはよう!」

「おはよう」

アリアはカイルが落ち込んでなくて安心した

「下にいこう、ご飯が食べられたら大変だ」

二人は急いで食卓へ向かう、食卓ではちょうどご飯が出来ていた

「ちょうどよかった、今呼びに行こうと思ってた」

「みんなそろったみたいだし、たべますか」

四人は、卵にかける物で激しく討論しながら食事を終える

「だから塩に決まってるんだろ!」

カイルは紅茶をのみながら言う

「分かってない・・・何年卵を食べてるんだ?、ソースの塩味、酸味、スパイスがあつてこそその卵、そう、調和だ」

カイルとアレックスの無駄な討論が続く

「ほら、そろそろ行くよ」

アレックスの母が言うところで一旦終了、支度を整えて、船着き場へ向かう

「おう、カイルにアリアじゃねーか、見送るか?」

「いえ、アレックスと一緒に護衛のバイトを」

「何だつて?パン屋のカイルが護衛だつて?」

カイルとアリアは苦笑い

「実は僕、剣をたしなんで印章術も使えるんです」

「ほー印章術を使えるのか、あいつら鱗が刃を通しやがらねえから役立つじゃねえか」

「よし、そうと決まったら乗ろうぜ!」

カイル達は船に乗り込む、じよじよに陸から離れる

「アレックスさん、ちよつと・・・」

「ん?」

アリアはアレックスを船の奥に呼ぶ

「はあー、綺麗だな」

カイルは海を眺める、今までの出来事とこれからことをゆつくりと考える

カイルはサーベルを取り出した、このサーベルは聖王国騎士団の印しが刻まれている

鞘は純白で鞘の口は細やかな模様が刻まれている、直刀の刀身は切っ先から拳を守るナックルガードまで血で汚れている

「僕は・・・」

途方もない罪悪感が心をおおう

「拭かなきゃ・・・」

カイルは布で何度も何度も繰り返して拭く

「カイル」

カイルはアレックスに呼ばれ、サーベルを急いで鞘にしまい、血に汚れた布を隠す

「何？アレックス」

「アリアから森の事を聞いたよ、無遠慮に色んな事聞いて悪かった」アレックスは頭を深く下げる

「いいよ、きにしてないから」

カイルはごまかすが、その沈み様は隠しきれない

「カイル、お前甘くないか？」

「え？」

その言葉にカイルは動揺する、今出るはずもない言葉だった

「帝国と聖王国に本気で狙われて、一人も殺さずにアリアを安全な所まで送り届ける、そんなことができると思ってるのか？」

「だからって！」

カイルの声が大きくなる

「殺しを正当化するなんて言っていないだろ！、お前は覚悟が必要だって言ってるんだ」

「覚悟？」

「ああ、アリアを守り抜く為のな」

カイルはアリアに誓った言葉を思い出す

「最後まで守り抜けば、死んだ兵士だって無駄死にじゃない、これから増えるかも知れない犠牲だって、お前が持つ強い意思、大事な人を守り抜くという信念を通せば十分に見合うはずだ！」

「そうか……」

その話を聞くと、心にこびりついていた罪悪感がじょじょに剥がれ落ちる

「ありがとう、アレックス」

「もつと褒め讃えろ」

「おい、もうすぐ鱗様の祠だぞー」

二人は外を見る、だが祠は見当たらない、あるのは大きな洞窟

「あれ？祠は……」

カイルの声とは裏腹に、どんどん中に進む

「鱗様は奥に奉られてるんだよ、途中モンスターがでるから漁師だけでは近寄らないんだ」

そのうち船は波止場に止まる

「おい、おめえら青春してねえで準備しろ」

洞窟の中にガントの声が響く

「こっちはオツケー、おっさんこそ準備は出来てんの？」

「船の方は任せとけい！」

ガントは胸をはる

「カイル、お前はオレと一緒に鱗様を取りに行く」

「ガントさんだけで大丈夫？」

「おっさん？大丈夫だよ、素手でマーマン倒せるし」

マーマンとは、固い鱗に身を包んだモンスター、魚に脚がついただけの外見だが、あごの力が異常に強い

「す、凄いね」

「焼いたら旨いつつてた」

「怖じけついたか？」

ガントが茶化す

「カイルいくぞ」

「うん」

二人は松明に火をつけて奥に進む

壁面は黒光りしている、角度を変えると様々な方向に鈍く光る

「ところでさ、なんで鱗様って言う名前なの？」

「そりゃー鱗様だからだ」

アレックスが当然のごとく言う

「いや、だから名前の由来は？」

「鱗だからだ」

「う、鱗？」

「綺麗な水晶球の中に青い鱗、それが鱗様だ」

「そのまんまじゃん」

「こら、馬鹿にすんな」

「なんで鱗が偉いの？」

「おっさんの話しでは、水に関わる者を守護する海神様、海が出来た頃から住んでいた水竜らしいぜ」

「確かに凄い鱗だね」

「そう、海の全てを統べ、見通しているんだ、お前とアリアの営みもな！」

「営み？」

「おいおい、しらばつくれるか？そこで」

「しらばつくれるもなにも・・・まず営みって何？」

「お前化石級だな、ガキの面してるだけあるぜ」

アレックスは頭を押さえる

「気にしてるんだからそういう事言うな！」

不意に何かが走ってくる音がする

「何か来た！」

「そうだね」

カイルはサーベルを抜き、アレックスはナイフを手にとる

「カイル、マーマンはあごの下と目が弱点だ、狙っていけ」

「印章術は？」

「巢に遭遇した時まで温存」

二人はじきに現れるであろうその敵に身構える

「カイル、アレックス」

「アリア？」

暗がりから現れたのはアリアだった

「アリア、モンスターで危険だからだめって言ったじゃないか」

「貴方達が怪我したら誰が手当するの？」

「アリアちゃん、それは確かにそうだけど、俺もカイルもそんなへまはしないぜ」

「で、でもなにもしないで貴方達ばかりにまかせきりはできないし・
・後ろにいるならいいでしょ？」

アリアはじつとカイルを見る

「後ろにいてね、絶対だよ？」

「はいっ！」

アリアは小走りで二人の元に近付く

「・・・真ん中だ」

アレックスはいつにない真剣な表情で言う

「毎回真ん中じゃない？・・・」

「全部真ん中だからな」

アレックスは目を細める、なぜか誇らしげだ

「っていつかなんでこんなに穴があるの？」

「そりやおめえ、鱗様を守る為だ」

「こんな単純じゃ意味ないよね・・・」

「単純なんじゃない、真っすぐなんだよ・・・海の男はな」

アレックス、また目を細め遠い目をする

「鱗様って・・・プツ」

アリアの時間差爆撃

「あつ！、いま鱗様の事馬鹿にしただろ」

「い、いえ笑ったわけじゃなくて・・・」

「何か臭わない？」

カイルの言葉にアレックスの顔が一変する

「・・・マーマンだ」

三人は素早く壁に身を寄せる、アレックスが低い姿勢で先を見る

「数は・・・多いな」

続いてカイルも覗く、青い光りが洞窟全体を照らしている

台座のまわりには大きな泡の塊と、それを守るようにマーマンが多数いる

「アレックス、どうする？」

「カイル、使える印章術は？」

「まだホーリアローしか刻んでないけど、少しは自信があるよ」

アレックスは考え込む、頬に青い光りが写る

「よし、俺は鱗様を取りに行く、カイルは魔法撃ちまくり、取ったらダッシュ、以上」

「それだけ？」

「1番安全な方法だ」

「アレックスさん1番危険よ」

「舐めんなよ？俺の《隼の印章》を！」

アレックスの腕が光る

「カイル！」

カイルは飛び出しホーリアローを放つ、がカイルは驚愕する

「えっ？」

アレックスはカイルの放ったホーリアローより先に、マーマンのあごを蹴りあげ、上に打ち上げる

あらわになったマーマンの柔らかい腹に、光の矢がのめり込む

「ギシャー」

マーマンは転がり、のたうちまわる

「危ない！」

アリアの声が一つ先に危険を知らせる、横からカイル目掛けてマーマンが噛み付こうとする

「うわっ」

飛びのき避ける、マーマンは再び噛み付こうとする

大きく開けた口にホーリーアローを撃ち込む

「みんな、鱗様は手に入れた、逃げるぞ！」

アレックスの掛け声と共に、三人は殺意に満ちた大空洞から走り出す

「アリア、松明ちょうだい」

アリアは後ろから呼びかけるカイルに松明を手渡し、先頭をゆずる三人は力の限り走り続ける、尾を引く松明は、カイル達と共に暗闇を切り開いていく

「ふう、まいたかな・・・」

カイル達は最初の分かれ道当たりで一息つく

「ここまでくれば縄張り外、おつてこねえと思っぜ」

アレックスは額の汗を拭い、ナイフをしまう

「み、皆さん体力が・・・ありますね」

アリアは息をするだけで精一杯なようだ

「ははっ、アリアは運動不足だな？」

「アレックスさんってなんでそんなにからかうのかしらっ！」

カイルは二人のやりとりを見ていた、その時アリアの背後でなにか動く

「アリアー！」

カイルはすんでの所でアリアを突き飛ばす、アリアは持っていた松明を手放す

「このっ！！」

至近距離から直接光の矢を頭に撃つ、マーマンは声を上げるまもなく絶命する

「はあはあはあ・・・怪我は・・・無い？」

「ありがとう、あなたも・・・」

座り込んだアリアの顔に生温い物がかかる

「カイル？」

アリアは立ち上がり、カイルの体を触る

「ア、アレックス！」

アレックスは異変に気付き、床の松明を手に駆け付ける

「カイル、その傷！」

カイルは左肩から腕まで深い傷がついている

まるでのこぎりで斬られた様にズタズタになっている

「大丈夫」

「そんなわけ無い！」

先に進もうとするカイルを引きとめると、あっけなくアリアの方向に倒れ込む

「包帯、包帯は……」

アリアは包帯をバックから取り出す、とめどなく流れる血を必死でとめようと巻き付ける

「ダメ、血が……止まらない」

アリアは傷口を手で押さえるが依然、止まらない

「アリア、足音が近いて来てる」

アレックスは松明を壁に立て掛け、ナイフを構える

「アリア、逃げるんだ」

カイルが精一杯、強い口調で言い放つ

「それは駄目、絶対に駄目」

「みんな死ぬ訳にはいかないだろ！」

分かれ道と祭壇方向からマーマンが多数現れる、アレックスが印章を発動する

「いえ、誰も死なせないわ」

アリアは血に染まった手を胸に当てる

「アリア、来るぞ！」

暗がりから、鈍く光る鱗が覗く

「お願い……カイルを……カイルを助けて……！」

叫び声が響く、アリアの胸元から温かい光りがあふれだし、暗闇を

打ち消す

「これは・・・」

アリアの放つ光はカイルの傷を柔らかに包み、治してゆく
「キシュー・・・」

洞窟を埋め尽くしていたモンスターは、静かにさつていく

「アリア、今の光はなんだ」

呆然とするアレックスが尋ねる

「わからない・・・でもお母さんに、本当に危なくなったらお祈り
しなさいって」

「カイルは？早く手当てしようぜ」

アレックスはカイルに目を向ける、肩から腕にかけての大きな傷は
無くなり、服の裂け目から肌が見える

「傷が治つてる！」

声で目を覚ましたカイルがアリアの膝から体を起こす

「アリアはすごいなあ・・・皆を一人で助けるなんて」

「そんな、私なんて」

「アリア、君は本当に・・・」

言葉が途切れ、ふらりと崩れる

「カイル、カイル！」

アリアは激しく体を揺する

「こりややべえ」

二人は急いでカイルを運ぶ

ろうそくが放つオレンジの光りが、淡く部屋を照らす

回りの暗さに目をこらすと窓が開け放たれ、星が顔を覗かせる

「ここは・・・」

静かにドアが開けられる

「目は覚めましたか？」

アリアはカイルに歩みより一杯の水を手渡す、カイルはそれを飲み干す

「ぷはー、水ってこんなに美味しいかったんだー」

「よっぽど喉が渴いていたのね」

アリアは控え目に笑う

「アレックスは？」

「酒場のお手伝いですって、稼ぎ時だからかりだされちゃったみたい」

「アレックスも大変だね」

「本当に」

二人は微笑み合う

「今こうして笑っていられるのもアリアが助けてくれたからなんだよね」

アリアは首を横に振る

「ううん、あなたが身をていして守ってくれたから私が今ここにいる」

「そっか・・・」

カイルは少し考える、そしてベットから飛び出す

「アリア、行こ！」

「でもまだ・・・」

「せっかくなんだし行かなきゃ損だよ」

カイルはアリアの手を引き、家の外に出る

外では人々でごった返していた、昼とは打って変わり、すごい賑わいである

「手、放さないで」

カイルはアリアの手を強く握り人込みを掻き分ける

右に左に強い力で押される、アリアはカイルに負けない位に握り返す人込みを避けるため、カイルはアレックスが働いているだろう場所を探す

そのうち開けた場所でそれらしき場所を見つける

「やっと見つけた」

二人は開いている席に腰掛ける

「アレックスさんがここで給仕をやってるっていったけど・・・」

「カップル一組様ご来店」

後ろから能天気な声がする

「アレックス！」

「力、カップルなんて茶化さないで」

アリアは顔を少し赤くして怒る

「顔が赤いな」

アリアは顔をそらす

「アレックス、この村にこんなに人いたっけ？」

「ああ、今日は慰魂祭なんだ」

「慰魂祭って何？」

「詳しくは説明してなかったな、慰魂祭って言うのは、海で死んだ漁師達の魂を鱗様に頼んで慰めて貰う為の祭なんだ」

「だから鱗様を・・・」

「まあな」

アレックスと話が進む中、人が減っている事に気付く

「アレックス、人減ってない？」

「ああ、もうこんな時間か、この祭の最後は歌で締め括られるんだ」
「歌？」

「俺は嫌いんだけどな、死者達を鎮める為に海神さまの歌を歌うんだけど、湿っぽくなるから嫌なんだ、オレの母さんもメンバーに入ってる」

アリアは何か考える

「その歌って私も歌っていい？」

「いいんじゃないね？、広場に俺の母さんいるから掛け合ってみ」

「ありがとう、カイル来て」

アリアはカイルを引っ張って広場まで急ぐ、すでに観客が集まりつ

つあった

「カイル、待っててね」

「アリア？」

アリアはアレックスの母に駆け寄り、二人は少しの間話したあと、アリアはその列の1番目立たない場所に列ぶ

「あのアリアが皆の前で・・・」

カイルはアリアの変わりように驚く

「カイル、私の歌を聞いてね」

列び終わると辺りが静まる、歌が始まるとカイルは綺麗な歌声に息を飲む

「これは・・・」

アリアは満月を背に透き通るような歌声で歌う、あの森で死んだ兵士に、一人、安らぎを願いつつ

第二章 ワダツミノウタ（後書き）

ね？痛かったでしょ？ これをダチに読んでもらってるんだけど、感想欲しい一面、かなり恥ずかしいのでもろ刃な感じです、て

いうかアレックスのキャラは大丈夫かな・・・では、出来れば

次話でまたお会いしましょう・・・ゼロ使よみてえ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0761h/>

亡国の印章

2010年10月11日05時08分発行